

作品紹介

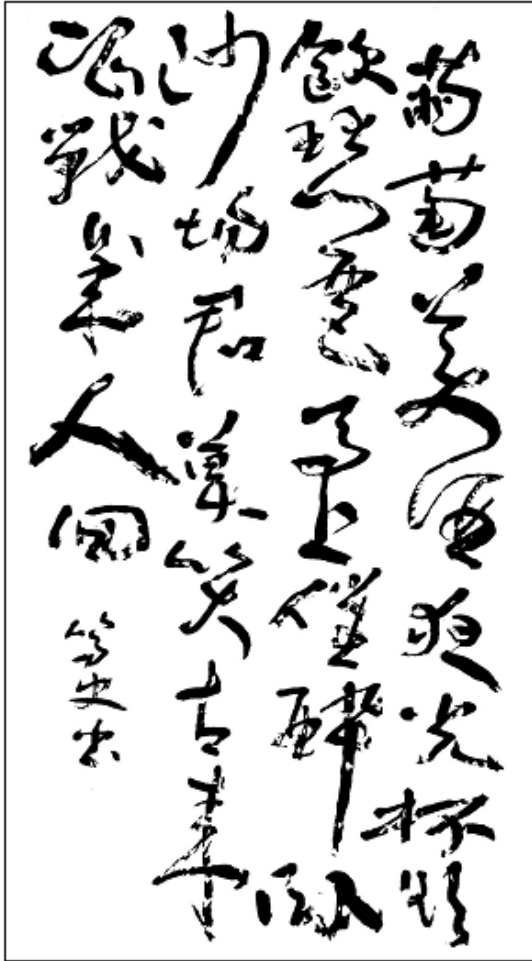
一、木塚篤史

創作 草書 王翰詩『涼州詞』 全紙

「葡萄酒美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回」

ふと、超濃墨で創作したらどんな感じだろうか？と思つてやってみたら、これがおもしろいおもしろい。紙と筆がふれあう感触がしっかりと伝わってきます。調子に乗っていると全体が見えなくなるのが困り者ですが、いやあ…楽しいもんです。



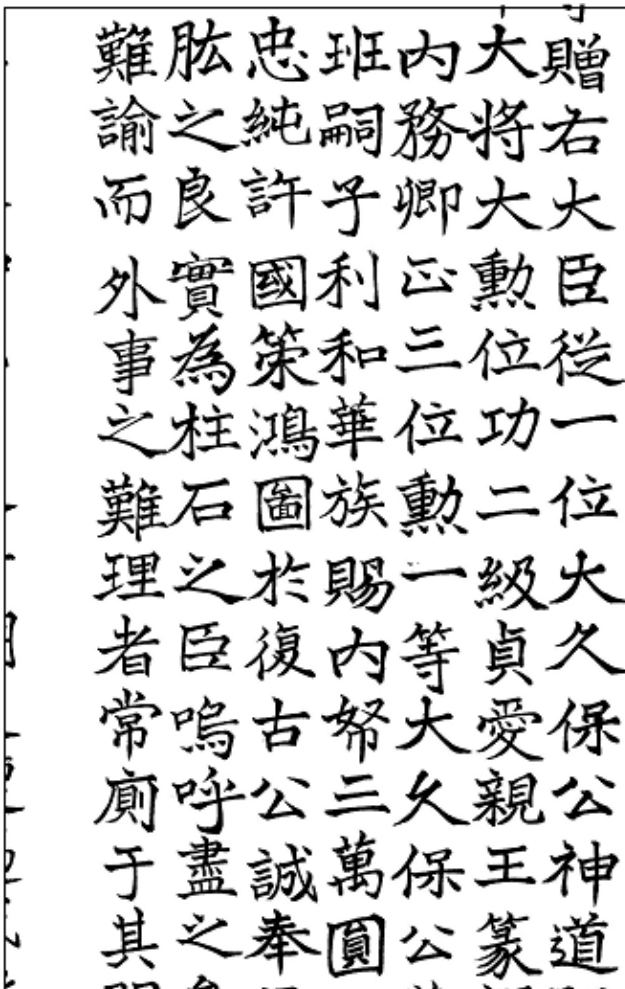
二、河野宏明

臨書 楷書・篆書 3尺×6尺

日下部鳴鶴『大久保公神道碑』

「故参議兼内務卿正三位勲一等贈右大臣従一位大久保公神道碑
：(合計、821字)」

やつと一枚書き終えると(約20時間)、達成感を圧倒する疲労感に襲われました。今回の作品制作を通じて、自分にとって多字数の作品は「書くものではなく鑑賞するもの」だと分かりました。うーん、かんぱーい(完敗)♪



三、仲宗根咲子

臨書 行草書 倪元璐『行草五言律詩軸』 170×46センチ

「橋影如長練 肥蛙侮瘦駒 十山則一水 東仏而西屠

竹倩雲為客 花因蝶作伴 慮頭糟氣好 何処三夫得」

字が好きだと思つて挑戦してみたのですが、甘かったです。後悔しました。でもやっぱり字は好きです。

五、山本典子

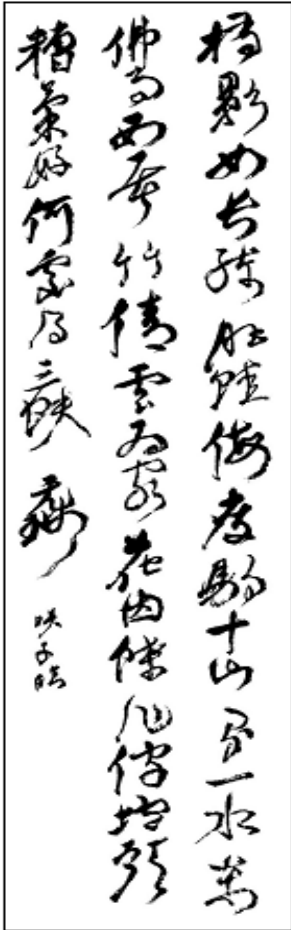
臨書 行書 蘇東坡『與夢得秘校札』 半切

「期也區々無他禱惟晚景

この作品を制作する途中で、愛について自分なりに考えてみました。

結論。「愛なんて気がついたときにそこにあるもの」

この「愛」の文字は気を遣いすぎですね。まだまだこれから修行を積んでいきたいと思えます。



四、鳥越亜希

臨書 行書 米芾『非才当劇』 半切

「人和端使一身閑」

題材は字のバランスで選びました。この作品は最初のほうに書いたもので、不完全ながらもなんとなくすんなりおさまって気に入りました。



六、松永智子

創作 調和体 中原中也『頑はない歌』 全紙

「思えば遠く来たもんだ 十二の冬のあの夕べ

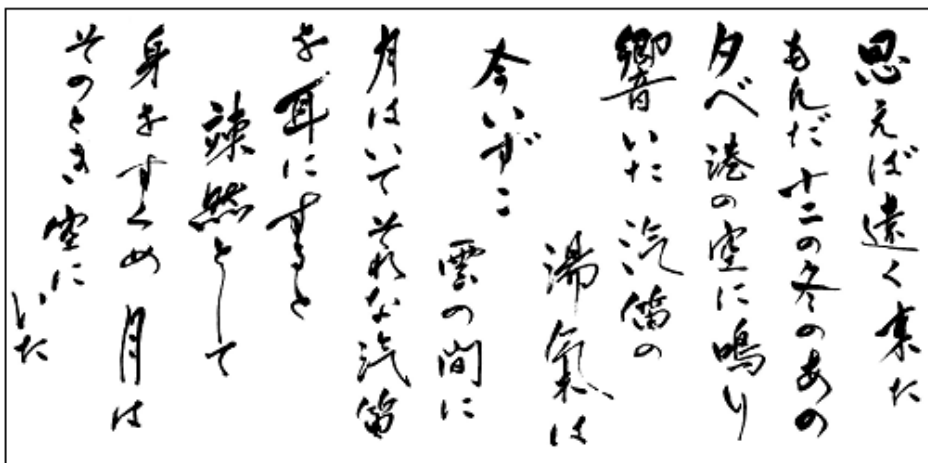
港の空に鳴り響いた 汽笛のゆげは今いずこ

雲の間に月はいて それな汽笛を耳にすると

疎然として身をすくめ 月はそのとき空にいた」

中也の歌より抜粋しました。港の汽笛、冬空の月。澄んだ空気と光の中に奥行きのある情景が浮かんできます。創作に当たっては、詩のリズムを乱さぬよう、空間の取り方、筆の運びに注意しました。

ブラームスの音に酔いながら筆を持つと、中也の思いが乗り移るようでした。



七、白田全弘

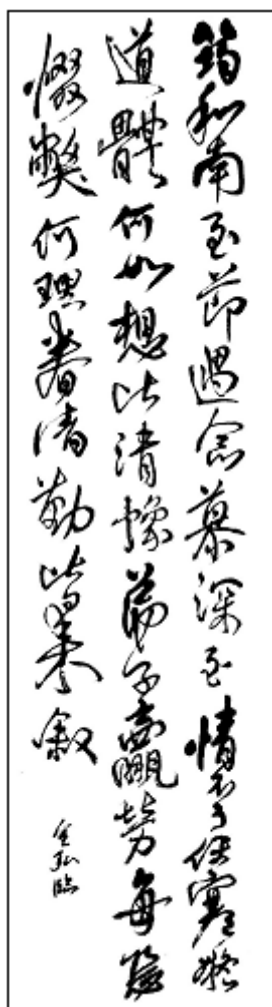
臨書 行書 王鐸『臨王庭筠行書軸』 2尺×8尺

「筠和南至節過念慕深至情不可任寒凝道體何如想比

清豫弟子羸勞每惡憊弊何理眷請勤比日来叙」

僕にとつて、書道の作品制作は一種のもぐらたたきのようです。ある部分を修正しようとしてそこに意識を集中させると、また他の部分がおかしくなってくる…といった具合です。集中力が足りないのかもしれない。

そういう意味で、今回の王鐸の臨書はとても難しかったです。文字の形や大小、墨の潤濁、全体のバランス…あれこれ考えるとキリが無いので、とにかく一行一行が自然に流れることを第一に書きました。精神面でも技術面でもまだまだ未熟さの残る作品ですが、ご覧頂ければ幸いです。



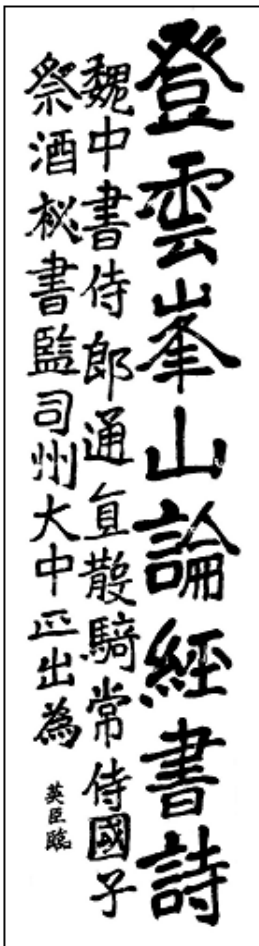
八、西原英臣

臨書 楷書 鄭道昭『論經書詩』 2尺×8尺

「登雲峯山論經書詩魏中書侍郎

通直散騎常侍國子祭酒秘書監司州大中正出為」

高校の時から書いてみたかった鄭道昭の論經書詩に挑戦しました。法帖の1文字1文字をみると確かに楷書作品であるが、全体をみると、行・草を思わせるような流れが作品の中にあるので、それを上手く表現するようにしました。



九、竹倉功祐

創作 調和体 『のーみゅーじっく のーらいふ』

半切1/3 × 4

椎名林檎 「月に負け犬」 (作詞・椎名林檎)

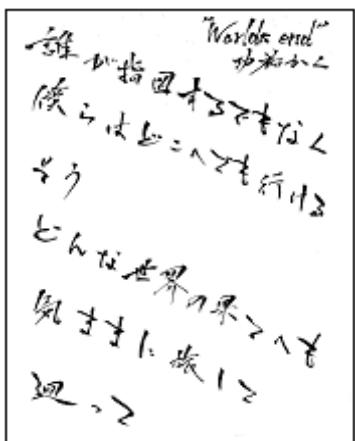
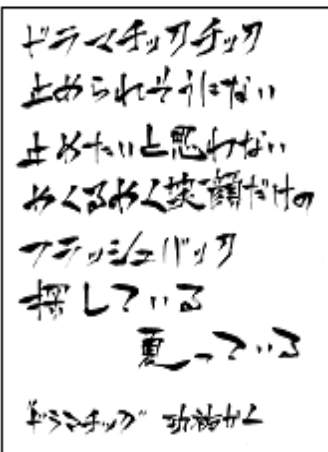
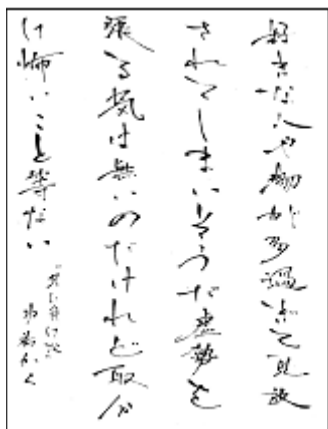
Base Ball Bear 「ドラマチック」 (作詞・小出祐介)

RADWINPS 「有心論」 (作詞・野田洋次郎)

Mr. Children 「Worlds end」 (作詞・桜井和寿)

ここ数年、歌の歌詞に影響されてばかりです。歌によって自分の感情がより明確になっていく、そんな気がしています。

「そんな自分自身を形作ってくれた歌の数々を表現してみたいなあ」と思ったところからあれこれ試し、このような形に辿り着き



一〇、小島千明

臨書 楷書 歐陽詢『九成宮醴泉銘』 全紙

「皇帝避暑乎九成之宮。此則隨之仁壽宮也。冠山抗殿。絕壑為池。跨水架楹。分巖竦闕。高閣周建。長廊四起。棟宇膠葛。臺榭

參差。仰視則 百尋。下臨則崢嶸千仞。珠壁交映。金」

きれいな字が書けるようになったので、欧陽詢の楷書に挑戦してみました。集中力が問題でしたが、いい勉強になったと思います。

皇帝避暑乎九成之宮此則隨
之仁壽宮也冠山抗殿絕壑為
池跨水架楹分巖竦闕高閣周
建長廊四起棟宇膠葛臺榭參
差仰視則逶迤百尋下臨則崢
嶸千仞珠壁交映金千明臨

一一、上原達也

臨書 行書 黃庭堅『黃州寒食詩卷』 跋文 半切四連

「東坡此詩似李太白。猶恐太白有未到處。此書兼顏魯公楊少師李西臺筆意。試使東坡復為之。未必及此。它日東坡或見此書。應笑我。於無佛處稱尊也。」

蘇軾と親交の深い作者が書いた跋文であり、「東坡がもう一度これを書いて、これほどに書けるとは限るまい」と、彼の作品を褒め称えている。この筆力に溢れた書をどう四連に収めるか、非常に苦心した。

東坡此詩似李太白
猶恐太白有未到處

此書兼顏魯公楊
少師李西臺筆意

試使東坡復為之
未必及此它日東坡或見

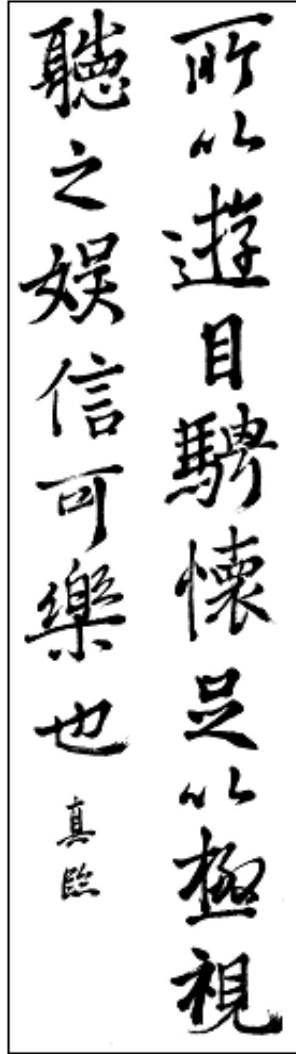
此書應笑我於無
佛處稱尊也

一一、肥後真

臨書 行書 王羲之『蘭亭序』 半切

「所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂也」

本格的に作品を書くのは初めてです。何枚も練習を重ねましたが、書けば書くほど完成が遠のいて行き、書道の奥深さを実感しました。

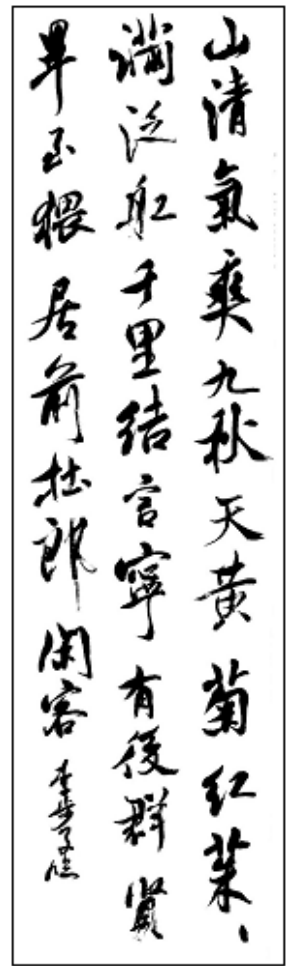


一二、頓部李歩子

臨書 行書 米芾『蜀素帖』 半切

「山清氣爽九秋天黃菊紅葉滿泛船千里結言寧有後群賢 至猥居前 杜郎閑客」

米芾の世界を表現しようと思ひ、縦画や力強さに着目して臨みました。この作品製作を通じて、自分らしさを取り入れつつ臨書するのはいかに難しいかを実感しました。



一四、砂川祐子

創作 行書 『たいせつなもの part.2』 4尺×4尺

目には見えないけれど、確かにある。離れていても、つながっている。そんな「絆」を、これからもたいせつにしていきたい。

